

Ⅱ 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置と歴史的環境

軽池北遺跡は、奈良県橿原市大軽町・石川町・五条野町の一部を占め、近鉄橿原神宮前駅の東南0.8kmに位置している。遺跡は海拔90mの西方へ張り出す狭小な舌状台地上に立地しており、台地の西には「桜川」の支流によって浸蝕された谷が南から北へ広がり、東は海拔150mの甘樫丘陵に続いている。遺跡の周辺は、桜川や高取川の支流が浸蝕して形成した数条の台地がほぼ南から北にのびており、起伏に富む複雑な地形を示している。

遺跡は奈良盆地を南北に縦走する古道である下ツ道と、上ツ道と横大路の交点から阿倍・山田・雷を経て丈六に至る推定山田道（現県道橿原神宮東口停車場・飛鳥線）交点の東南約0.6kmに位置している。この交点付近は古代交通路の要衝として重要な位置を占め、その範囲については必ずしも明確でないが、『記紀』・『万葉集』に度々あらわれる「^{かる}軽」の地に比定されている。軽の地については、『日本書紀』に懿德天皇の「軽曲峽宮」、孝元天皇の「軽境原宮」、応神天皇の「軽島豊明宮」がみえ、『古事記』の垂仁天皇条および『日本書紀』応神天皇11年条に「軽池」がみえる。さらに『日本書紀』応神天皇15年条に「軽坂上厩」が、同じく雄略天皇10年条に「軽村」が、欽明天皇23年条に蘇我稻目の「軽曲殿」が、推古天皇20年条には皇太夫人堅塩媛を橿原大陵に改葬し、「軽街」で誄したとあり、天武天皇10年条には、「軽市」がみえ、朱鳥元年条には「軽寺」に封百戸施入の記事がみえる。このほか、『万葉集』に「軽池」「軽路」「軽之社」が散見する。古い段階における宮の実在については多分に疑わしく、そのほかの所在地も必ずしも明確に比定されていないが、「軽街」「軽市」が下ツ道と山田道の交点付近に発達した集落であることは容易に推測できる。また「軽寺」は後述するように現大軽町所在の法輪寺付近に比定でき、おおむね現在の大軽町、石川町付近をいにしえの軽の地に想定する事ができる。また「厩坂」は『日本書紀』によれば軽坂の上に建てられた厩に起源をおく地名で、軽坂と厩坂は同地に存在したことが知られる。厩坂には舒明天皇の「厩坂宮」や藤原氏の氏寺である興福寺の前身「厩坂寺」が造られたと伝えられている。

2. 周辺の遺跡と既往の調査

軽池北遺跡の周辺には、先にあげたような著名な遺跡が点在し、これまで多くの考証が試みられている。しかし、どの遺跡も本格的な調査は行われておらず、多くの問題点を残していることも事実である。ここでは、それらのうち特にいにしえの軽に関連の深い遺跡について概要を記して参考になりたい。

1. 見瀬丸山古墳（橿原市大軽町・見瀬町）（第3図の1）

軽池北遺跡の西方を南から北にのびる台地を利用して築かれた6世紀最大の前方後円墳であ

る。墳丘は3段に築成され、全長約310m、後円部径約155m、前方部幅約220mを測る。周囲には一重にめぐる周濠および外堤の痕跡を残し、周濠を含めると全長約400mに達する。これまでゴーランド氏らによって調査されており、後円部に長大な横穴式石室があり、家型石棺2基を納めることが知られている。被葬者については、欽明天皇と堅塩媛を合葬した松隈坂合陵、あるいは宣化天皇の身狭桃花鳥坂上陵にあてるとの説がある。⁽¹⁾⁽²⁾

2. 法輪寺周辺（橿原市大軽町字寺垣内）（第3図の2）

法輪寺は、見瀬丸山古墳北方の台地上に位置し、現在は本堂が一棟残るのみである。この本堂下には東西約25m、南北約20m、高さ約1.5mの土壇があり、また本堂の北西にも長方形の土壇状のたかまりがある。これらの二つの土壇周辺からは、飛鳥時代末から奈良、平安、鎌倉時代にかけての古瓦が出土しており、飛鳥時代創建の寺院跡と考えられている。石田茂作氏は、本堂下の土壇を金堂跡、本堂北西の土壇を講堂跡にあて、金堂の西に塔を配する法隆寺式伽藍配置と推定している。保井芳太郎氏は、本堂の南、民家一戸を隔てた位置に明治末年まで存在した妙観寺跡から円形の造り出しをもつ礎石13個が出土したことを伝え、これを塔あるいは金堂跡とし、本堂下の土壇を講堂跡とも考えられるとしているが、本堂北西の土壇についてはふられていない。現状では法輪寺周辺に約100m×75mの南北に細長い平坦地が認められ、本堂下の土壇を金堂跡とし、その南と北に塔と講堂を配する四天王寺式伽藍配置を推定することも可能である。伽藍配置などについては今後の本格的調査にまつ点が多い。⁽³⁾⁽⁴⁾

ところで、この寺院跡については、諸説とも一致して軽寺跡に比定している。軽寺については先述したように『日本書紀』朱鳥元年（686年）に松隈寺、大窪寺とともに30年を限って封戸を施入された記事がみえ、また『御堂関白記』には、寛弘4年（1007年）に藤原道長の一行が金峯山詣での折りに軽寺に宿した記事がある。さらに延久2年（1070年）の『興福寺雑役免付帳』には、その寺田の所在が記載されている。福山敏男氏は、このほかに『続遍照發揮性靈集補闕鈔』巻第十の「故贈僧正勤操大徳影讃并序」の一節にみえる「駕龍寺」を軽寺のこととし、同じく「遍照發揮性靈集」第二に収める「大和州益田池碑銘并序」の「龍寺」を「駕龍寺」を略したものとし、平安時代初期に築かれた益田池東方に軽寺があったとする。福山氏は、さらに『御堂関白記』の日程記事を引き、道長が南都大安寺から中ツ道沿いの井外堂（現天理市西井戸町付近）を経て軽寺に宿し、翌日以降壺坂寺、観覺寺を経て金峯山に至る行程から、軽寺を益田池東方の下ツ道沿いにあったものとし、位置関係から法輪寺を軽寺跡とする。このほかの説もおおむねこの範囲を出るものではない。⁽⁵⁾

3. ウラン坊廃寺（橿原市石川町字ウラン坊）（第3図の3）

石川町の北方、推定山田道に面する水田一帯は字ウラン坊と呼ばれている。最近までこのウラン坊の西寄りの道路上に花崗岩製の唐居敷が放置されていたが、道路拡幅時以降行くなえが知られなくなった（第4図）。このほかに円形の造り出しを持つ礎石6個が大正7年にこのウラン坊から発見されたと伝え、また周辺から複弁蓮華文軒丸瓦や重弧文軒平瓦が出土することも



第3図 軽池北遺跡付近の遺跡



第4図 ウラン坊所在の唐居敷

所在を石川町字ウラン坊付近とするが、飛鳥時代に遡る古瓦の出土をみない点から断定を避けている。これに対して、佐藤小吉氏は石川宅の所在を河内国石川郡にあて、石川精舎ウラン坊所在説には否定的である。厩坂寺の沿革については、『興福寺縁起』『興福寺伽藍縁起』などによれば、天智2年(663年)⁽⁹⁾創建の山階寺を天武元年(673年)高市郡厩坂に移したものとし、さらに和銅3年(710年)平城遷都にともない春日の地に移り興福寺と称したと伝える。この高市郡厩坂が先述したように軽坂と同地とすれば、やはり厩坂寺も軽の地に所在したと考えられ、福山氏はウラン坊廃寺と軽寺を除いては天武朝の瓦を出土する遺跡が軽周辺に認められないことから、ウラン坊廃寺を厩坂寺にあてている。⁽¹⁰⁾

ウラン坊から出土する古瓦は、川原寺や紀寺跡から出土するものとはほぼ同時代と考えられ、今のところそれ以前のものも、以降のものも知られていない。このことは厩坂寺が天武元年から和銅年間まで存続したという記事に符合し、ウラン坊廃寺を厩坂寺跡とする説に有利である。しかし、平城遷都にともなって旧京から諸寺が移る場合、その多くは旧京における瓦を再利用していることが近年知られつつある。興福寺食堂の調査では、7世紀後半に遡る瓦が数種類出土しており、そのうち第6型式とされるものは、厩坂寺に用いられていたものと推定されている。⁽¹¹⁾しかし、この瓦はウラン坊廃寺では知られておらず、むしろ久米寺などに同範のものが知られており、なお多角的な検討が必要であると考えられる。

4. 丈六北・南遺跡(樫原市久米町字丈六)(第3図の4・5)

下ツ道と推定山田道交点西方の丈六台地から多数の掘立柱柱根と礎石が発見されている。丈六北遺跡では、昭和15年に直径30cm前後の掘立柱多数が検出されている。⁽¹²⁾工事中の調査であるため建物の配置、年代などは明瞭にされなかったが、相当大規模な遺構の一部と考えられ、舒明天皇の厩坂宮跡の一部とする説もある。道路を隔てた丈六南遺跡からは昭和31年に礎石9個がやはり工事中に発見された。これらのうち3個は中央に枿穴をもち、ほかのものは上面を平らにしたものであったという。その柱間は約1.8mを測るが、建物の性格は明らかでない。周⁽¹³⁾

知られている。⁽⁶⁾寺域の範囲などについては不明な点が多いが、7世紀後半に建立された寺院跡と考えられる。保井芳太郎氏は、この寺院跡を石川精舎跡に、福山敏男氏は厩坂寺跡に比定している。⁽⁷⁾このうち石川精舎跡については、⁽⁸⁾『日本書紀』などに敏達13年(583年)蘇我馬子が百濟使麻深臣の持てる弥勒石仏と佐伯連の有する仏像を石川宅に安置したのをその始まりとしたと伝える。保井氏は、この石川精舎の所



第5図 藤原京南西地区出土の土器（奈良国立文化財研究所資料）（縮尺2分の1）

辺から古瓦、蓮華文鬼板や土器などが出土したと伝え、これを厩坂寺跡に比定する説もある。

5. 藤原京南西地区（橿原市石川町 282 番地）（第 3 図の 6）

この遺跡は下ツ道と推定山田道交点の東方約 100 m にあたり、昭和48年秋に住宅建設に先立って調査がおこなわれた。調査地は軽池北遺跡の西方を南北にのびる谷の出口付近にあたり、13世紀前半頃に形成された旧河道が検出されている。遺物には、弥生時代後期から13世紀に及ぶ土器をはじめ、7世紀後半の瓦、土馬、銅銭などがあり、12～13世紀の瓦器、土師器が主体を占める。それらのうち、「延末」「延末女」「義明房」「薬師」「□□神王」「不知姓御子」の名称を付した絵皿が注意される（第 5 図）。

以上あげた他にも、平安時代から中世にかけての土器が数ヶ所で出土している。しかし、いずれもその遺構の性格は明らかでない。平安時代以降の軽周辺については、不明な点が多い。

註

- (1) 森 浩一『古墳の発掘』1965 P. 153。
- (2) 和田 幸「見瀬丸山古墳の被葬者―「継体・欽明朝内乱」に関連して―」『日本書紀研究』7 1973 P. 315。
- (3) 石田茂作「軽寺」『飛鳥時代寺院址の研究』1936 P. 91。
- (4) 保井芳太郎「大軽寺」『大和上代寺院志』1932 P. 41。
- (5) 福山敏男「軽寺」『奈良朝寺院の研究』1948 P. 169。
- (6) 保井芳太郎「石川精舎」『大和上代寺院志』1932 P. 32。
- (7) 註 6 に同じ。
- (8) 福山敏男「葛木寺及び厩坂寺の位置について」『大和志』1—3, 1934 P. 77。
- (9) 佐藤小吉編『飛鳥誌』1944 P. 293。
- (10) 註 8 に同じ。
- (11) 奈良国立文化財研究所『興福寺食堂発掘調査報告』1958 P. 34。
- (12) 奈良県教育委員会『橿原』1961 P. 176。
- (13) 註12に同じ P. 178。
- (14) 奈良国立文化財研究所「藤原京南西地区の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』4 1974 P. 15。
- (15) 絵が描かれた 6 個の皿のうち、「薬師」の皿以外には、すべて頭に当る位置の裏側に「上」という墨書がある。これらは土師器皿の特徴および共伴した瓦器から13世紀前半頃のものと思われる。

これらの皿は、木下密運氏の御教示によれば、「六字経法」もしくは「七瀬祓(ななせのはらい)」に関連するものではないかという。

六字経法は六字神呪経などにもとずき、呪詛反逆あるいは病気などのためにおこなうものであり、結願の夜、船の上に護摩壇を移しておこなうのを六字河臨法という。

七瀬祓は古代に朝廷でおこなわれていた祓の一つで、七ヶ所の河海に臨んで行なわれていたものである。それは陰陽師が人形(折櫃に入れ、蓋をし、祓をする場所を記す)を進めると女官がこれに種々の衣を着せて天皇に奉り、天皇がこれに息をかけ御身を撫でて返し、再び折櫃に入れて七瀬に送るものである。のち、公卿なども倣って行なうようになった。